

# 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属:(学部(研究科)・学年) 医学部保健学科看護学専攻・3年

氏名: 上村桜

|                  |                      |
|------------------|----------------------|
| 授業科目名            | 家族看護論                |
| 研修先(国・地域)<br>滞在地 | アメリカ、マサチューセッツ州、ボストン  |
| 研修期間             | 平成28年9月3日～平成28年9月10日 |

[研修を通じて得た成果]ボストン小児病院では、施設見学やNPについての説明を受けた。NPには、様々な専門分野があることを学んだ。NPは、3P(Pharmacology, Pathophysiology, Physical Assessment)や各々の専門分野の知識・技能など、診療のための知識や技術を身に付けておくことも大切であるが、看護師として患者さんの心に寄り添う、側にいることも大切であると改めて考えた。ボストンカレッジでは、施設見学やFontenot教授らとNPについて懇談した。NPと医師の境目について話題となった。Fontenot教授らは、NPと医師の境目が曖昧であったとしても、看護師としての自覚、信念を持って、自分の看護を行うことが大切であると述べていた。それは、看護師として大切な心得であると考えた。HSPHでは、HSPHや周辺の病院のことや歴史についての説明を受けた。その後、イチロー・カワチ教授とお会いした。カワチ教授のお話を聞いて、とても印象に残っていることが2つある。1つ目は、部屋の中の副流煙を吸うことにより亡くなっている人を300人という数字で表し、これはニュージーランドの交通事故で亡くなる人の半分であることがわかったことにより、禁煙活動が始まったことである。2つ目は、東北震災後の研究で物的支援、医療も大切であるが、元からの地域のつながり(ソーシャル・キャピタル)が大切であり、また、これは認知機能にも影響し認知症を妨げることができるということである。これらの研究のお話を聞いたことにより、健康の社会的決定要因は人の健康に大きく影響することを学んだ。その健康の社会的決定要因に目を向け、良くする・整えていくことが大切であると考えた。この研修で学んだことを自分の看護に活かしていきたい。

[研修後の抱負]健康の社会的決定要因は、その人の健康に大きく影響すること、またソーシャル・キャピタルの重要性を学んだ。私たちが患者さんや住民などの対象を見るとき、その対象の家族にも目を配る必要がある。経済状況や住居などその家族の状況、家族の周辺環境は健康の社会的決定要因であり、看護師としてそれらを強化していく働きかけができるようになりたい。現代の日本は、プライバシーの保護などで近隣との関わりが減ってきていると感じる。しかし、元々の地域の人々のつながり、連帯感、協力関係などソーシャル・キャピタルが、人々が健康的に生きる上で重要である。地域の人々のソーシャル・キャピタルを強化させる働きかけもできるようになりたい。

(記入にあたっての注意) この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

# 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属:医学部保健学科看護専攻3年

氏名: 鶴川 千佳

|                  |                        |
|------------------|------------------------|
| 授業科目名            | 家族看護論                  |
| 研修先(国・地域)<br>滞在地 | アメリカ, マサチューセッツ州, ボストン  |
| 研修期間             | 平成28年9月3日 ~ 平成28年9月10日 |

## 〔研修を通じて得た成果〕

Boston Children's Hospital では、病院見学をし、NP についての説明を聞いた後、実際にNPの方と話すことができました。病院の入り口に入ったときに様々な人種の子供のイラストが映し出されている大きなスクリーンがあり、子どもの文化的背景や多様性を理解しやすいように工夫がされていた。NPの方たちは、小児のなかでもそれぞれの分野の専門性を追求しており、多くの知識と技術、リーダーシップを持ち合わせ、自信をもって患者と接していると感じた。Boston College では、教授から NP についての説明を聞いた。特に印象に残ったことは、NP と医師の違いについて聞いた時である。私は説明を受けていく中で、アメリカの NP は限られてはいるが日本の看護師ができない処方や医療行為が許されており、医師とのボーダーラインが曖昧になってしまわないのかという疑問があった。この疑問にロイという教授は、たとえ医師と同じことをしていたとしても NP であるという信念が重要であると言った。看護の視点から患者をケアすることができるのは医師ではなく NP にしかできないことだと思った。ハーバード大学では、カワチ イチロー教授の講義を受けた。格差が大きい社会は、貧困層だけでなく所得が高い人の健康にも影響を与え、人々全体の健康状態に影響を与える可能性があるということに驚いた。起こった格差を最小限に抑えるために低所得の家庭に生まれた子どもに質の高い教育をしたり、医療制度を充実させたりすることが人々の健康を守ることが必要だと学んだ。HSPH の大学院生との交流では、留学をしたきっかけや留學生活の話聞くことができ、留学の魅力を知ることができた。

## 〔研修後の抱負〕

離島・へき地の地域特性を活かした看護を実践ができるようになるためには、人々を取り巻く環境や社会のありようを知り、人々の病気や健康となる要因を考えていかなければならない。そのために、鹿児島県の離島・へき地の地域特性について知り、それが人々の健康にどのような影響を及ぼしているのかを考え、解決策を見出し、実践することができる力をつけていきたい。また NP のようにリーダーシップをもち、チーム医療の中で看護の役割を確立させることのできるよう実習などのあらゆる場で学びを深めていきたい。

(記入にあたっての注意) この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

## 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属:医学部保健学科看護専攻3年

氏名:中原 由衣

|   |                        |
|---|------------------------|
| 授業科目名   | 家族看護論                  |
| 研修先(国・地域)<br>滞在地  | アメリカ合衆国 マサチューセッツ州 ボストン |
| 研修期間  | 平成28年9月3日～平成28年9月10日   |
| 〔研修を通じて得た成果〕<br>今回の研修では、健康格差について健康の社会決定要因・行動科学の観点からの学びを深めるということが目的であった。先生方には、研修先に向かう前から予習としてWHOがまとめた『SOLID FACT』という健康の社会決定要因についての冊子について理解していくように指示されており、これにより現地での体験やお会いした研究者の方々の話の内容をより理解することができた。<br>現地の生活を実際に体験し、住民と同じ公共交通機関を使用しながら移動することで人々の様子から文化や人種、所得が決定要因としていることを実感することができた。加えて、アメリカということで食生活が生活習慣病などの疾患の原因になっていると考えていたが、実際にはオーガニックのお店が充実していたり、トランス脂肪酸が禁止であるため製品に使用されていないことが明記されたりと、食の健康に対する意識の高さを認識した。このことから、人が自ら健康に対して注意を払うことのみがその人の健康に関与するのではなくその他の要因も重要であるということを知った。<br>研修のプログラムとして訪問したボストンチルドレンズホスピタルでは子ども向けに施設内にさまざまな子どもが楽しめる工夫が施されていたり、日本の病院とは異なり全てが個室であるためプライバシーや家族との時間を確保したりしやすいという特徴があった。また、こことその後に訪問したボストンカレッジでは日本で導入が議論されているNPの制度や実際について学んだ。ここでの研修を通して、医師は疾患を看護職(NP)はその人の生活全体を診るという自分自身の考えを形成することができた。 |                        |
| 〔研修後の抱負〕<br>研修中は、英語で相手の考えを聞き取り、自分の考えを述べるのが求められることが多かった。しかし、相手の話を聞きとることが上手いかず、意見を述べるできないことが多かったので英語の力の改善が今後の課題となった。このため、今後ともTOEICを継続して受験するなどして英語の力を高めていきたいと考えている。<br>今回の研修を終了して改めて卒業後に大学院に進学して学びたいということを知ることができた。自分の希望する進路を実現するために講義だけでなく幅広く分野について学ぶことが必要だと考えた。  |                        |

(記入にあたっての注意) この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

# 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者 原口 朋子

所属:医学部保健学科看護学専攻 3年

氏 名: 原口 朋子

|                  |                                  |
|------------------|----------------------------------|
| 授業科目名            | 家族看護論                            |
| 研修先(国・地域)<br>滞在地 | アメリカ合衆国 マサチューセッツ州 ボストン           |
| 研修期間             | 平成 28 年 9 月 3 日～平成 28 年 9 月 10 日 |

## 〔研修を通じて得た成果〕

ハーバード公衆衛生大学院では、授業を聴講し、教育や仕事、収入の観点から健康格差を考えた。タイタニックを例に、階級が高い人ほど先に救出されたために生存率が高かったことを挙げ、収入が命の長さにどれほど影響を与えているのか、そして命に格差があるべきではないということについて考えさせられた。また、研究において因果関係を考えるときは、両者に関与している要因はなにかについて検討を重ねることの重要性を学んだ。

カワチ先生とのディスカッションでは、人との交流が多い人、つまりソーシャルキャピタルが強い人ほど災害などがあつたときに寿命が長くなるということを知り、保健師として災害と社会の高齢化の問題に取り組む際は、災害がおこる以前から地域のソーシャルキャピタル強化をしなければならないと感じた。

Boston Children's hospital では、施設は、子どもが楽しめるような空間づくりが工夫されていた。小児病院だからこそ、自殺、虐待、拒食症、性同一性障害の患者とその家族に対してケアすることも多く、個別的かつ専門的であるNPが重要な役割を果たしていると感じた。

Boston college では Nurse Practitioner(以下 NP)の果たす役割について学んだ。看護師のできる行為が医師の業務の一部まで広がっても、私たちは何者か、看護とは何か、を常に心に置き、NP は看護の視点から患者さんの生活をみるべきだと学んだ。家族を丸ごととらえ、生活をみる家族看護では特にプライマリケアをする NP が必要になると考えた。

トリニティ教会では、ホームレスには疾患を抱えた人も多く、ストリートドクターが大きな役割を持っていると聞き、医療の果たすべき役割を考える機会となった。また、家族でミサに来ている人も多く、この教会が家族の心のよりどころになっているという地域性を知ったうえで、宗教の場での家族看護が必要だと思った。

そして、米国に留学に来ている日本人と話し、留学の準備や留学中の生活について聞いたこと、多くの人と出会ったことで、進学・留学を現実的に考える機会とすることができた。

さらに、日本を離れて、街で人々の生活をみて、気づいたことを記録できたことは、地域を知るという大規模なトレーニングをすることができたことにもつながり、今回の研修の成果となった。

## 〔研修後の抱負〕

今回の研修で、私は上記のことを学び、公衆衛生という分野に対してさらに興味を持つことができた。中でも、ソーシャルキャピタル強化の観点から、保健師として、災害と社会の高齢化の問題にどう取り組めばいいのかについては、文献や研究を通して学びを深めていきたい。今後は、グローバルな視点で学び、かつそれを地域にも還元できるような看護職になることを目標に励んでいきたい。

(記入にあたっての注意) この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

# 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属:)医学部保健学科看護学専攻 3年

氏 名:松田 朱里

|  |                                   |
|--|-----------------------------------|
| 授業科目名  | 家族看護論                             |
| 研修先(国・地域)<br>滞在地   | アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン              |
| 研修期間   | 平成 28 年 9 月 3 日 ~平成 28 年 9 月 10 日 |
| 〔研修を通じて得た成果〕<br>今回の研修を通じて得た成果は主に2つあります。1つ目はボストンカレッジで、Holly B. Fontenot 先生、Sister Roy と看護や NP について討論した時のことです。彼女らは「看護とは何か、私たちは何者であるか」「看護師として何をもって自信となるか」と看護師の本質的なことについて話してくれました。自分が今後看護師として働く上で、どういう姿勢で患者と関わっていけばいいか分かったように思います。また、「看護とは何であるか」という一生の疑問に対して自分なりに答えが出せるよう、看護を追求したいと思いました。さらに、「NP をつくるのは看護師の役割だ」とも話されていました。現在、NP がおかれることで医者が否定的な立場をとっていますが、その医者の批判をどうメリットにするのか、また看護師にしかできないことが必ずあるので、日本に NP という制度はありませんが、離島・へき地へ十分な医療を届けられるような工夫を考える必要性を感じました。<br>2つ目は、イチロー・カワチ教授との対談と講義です。カワチ教授は、日本国内の健康格差について研究されている人で、健康格差縮小に人のつながりを挙げています。鹿児島の離島・へき地は、医療や教育など様々な面で不利な状況です。このような地域特性に特化した看護を展開していくためにはどのようなことをしていかなければならないのか、ヒントをもらえたと思います。また、疾患を持つ下流にいる人を上流へあげる、または上流の人を下流へ下げない工夫を看護師としてできることはないか考えていきたいです。 |                                   |
| 〔研修後の抱負〕<br>研修を終えて、看護師としてできることが今まで思っていた以上に多く、幅広くあり、自分が目指したい看護が何であるか模索中であるが、決まったらその看護を追求したいと思います。それが保健師であるならば、日本という地域特性を考慮し、健康の社会格差をフラットにできるような地域づくりができるようになりたいと思います。また、今後の学生生活のなかで世界の看護師の取り組みについて調べていこうと思います。  |                                   |

(記入にあたっての注意) この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

# 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属:医学部保健学科看護学専攻 3年

氏 名:米丸 麻未

|                  |                                    |
|------------------|------------------------------------|
| 授業科目名            | 家族看護学                              |
| 研修先(国・地域)<br>滞在地 | アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン               |
| 研修期間             | 平成 28 年 9 月 3 日 ~ 平成 28 年 9 月 10 日 |

## 〔研修を通じて得た成果〕

今回の研修では、トリニティ教会や Boston children's hospital、Boston college、ハーバード公衆衛生大学院を訪れ、NP (Nurse practitioner) や健康格差について学んだ。トリニティ教会は social justice の取り組みとしてホームレスに食べ物やヘルスケアを提供していて、社会的弱者の身近な助けとなっていた。教会では毎週礼拝が行われるので社会的弱者のほかにも地域住民が習慣的に訪れる。私は、教会が地域コミュニティの形成やその拠点になっているのではないかと考えた。習慣的に地域で交流や情報交換が行われることで助け合いの精神やネットワークを根付かせることができる。教会にはこのような、地域をつなぐ役割も担っているのではないかと感じた。Boston children's hospital や Boston college では NP に話を聞き、NP の仕事の実際や患者の事例、果たす役割や責任などを学んだ。NP は日本にはない職業であるが、アメリカでは現在 22 万 2 千以上もの NP が存在し、活躍している。NP は医師の監督の下で独立して診療や治療、薬の処方などができるため、殆ど医師の仕事と変わらないように感じる。しかし医師と決定的に違うのは、医師は患者の疾患を治すが、NP は患者を健康に保つ (keep health) という視点でアセスメントを行うという所である。NP は患者の身体的な健康だけでなく精神的・社会的・スピリチュアル的な健康も保つために患者の社会背景や家族関係をよく捉える。NP は医師よりも低コストであることや離島・僻地での医師不足を解消するために今後日本でも需要が高まる可能性がある。そうした時に、NP と医師の違いは何かということが問題になることが予想される。しかし、NP と医師には前述のような決定的な違いがあるということ、NP である以前にNsであることを自覚し、自信をもって自分なりの看護行うことが大切であると考え。ハーバード公衆衛生大学院ではカワチ・イチロー教授の話を聞き、健康の決定要因について学んだ。授業では主に収入の差が栄養状態や受けられる教育に影響を及ぼし、疾病のかかりやすさや災害・事故が起きた際の死亡率に影響するということを学んだ。健康格差が大きければ大きいほど社会全体への悪影響は大きくなる。そのため、社会全体として様々な格差を少しでも小さくするために努力をしようという風潮を作り、弱い立場の人を支えることが全体の健康増進につながる利益のあることであると理解を深めていくことが大切になると考える。また、ソーシャルキャピタルについても学んだ。ソーシャルキャピタルとは、目に見えないが人と人との間にあるつながりがもつ力で、東日本大震災の後 1 番回復につながったものだと考えられている。これから益々災害と社会の高齢化が危惧される中で、どうやってソーシャルキャピタルを強化するかが大事になる。そのために、トリニティ教会のように習慣的に交流する場を設けることや、地域住民自身が地域社会に参加することの重要性を認識することが大切になると考える。

## 〔研修後の抱負〕

今回学んだことを基盤として、自分が住んでいる地域をもう一度見つめなおしてどこに問題があるかを考え、地域をよくするために何が必要か、また格差を小さくするためには具体的にはどうすればよいかを考えていきたい。また、看護を学び、これから先患者と向き合う上で患者のさまざまなバックグラウンドに目を向けて多角的に捉え、NP のように患者の社会背景や家族関係を深く考慮したアセスメントを行うよう心がけたい。